

『人生地理学』の日本地理思想史上における意義

竹内啓一

私は、地理学のなかでも、最近では地理思想史を専攻しています。地理という漢字の組み合わせは、中国の古典に紀元前からありましたが、このふたつの漢字が「チリ」と発音されて日本語になったのは比較的新しく、一七六〇年代の蘭学者によってのことです。地理学がひとつの学問と考えられるようになったのは、せいぜい幕末の頃で、さらに大学で地理学または歴史地理学という講義がなされるようになったのは、一八八〇年代末になってからのことです。しかし場所や領域、あるいは環境についての考え方、それらをどう認識する

かということは、地理などという言葉がなくても、また西洋で確立したひとつの学問としてそれが輸入される前から、あらゆる文化のもとにあったわけで、それを社会思想史として研究するのが地理思想史なのです。牧口常三郎の地理思想史、とくに地理教育についての考えを検討するためには、彼の『人生地理学』以外の著書、一九一二年の『教授の統合中心としての郷土科研究』、一九一六年の『地理教授の方法及び内容の研究』、さらには一九三〇年以降四巻にわたって刊行された、『創価教育学体系』が検討されなければならないで

しよう。そのような仕事も私はしてまいりましたが、本日は初版発行百周年を記念しての講演会ですので、『人生地理学』の日本における地理思想史上の意義に絞った話を致します。

この点との関連でお断りしておくと、牧口常三郎が日蓮正宗に入信したのは一九二八年のことであり、『人生地理学』の最終版と考えられる第十一版の発行が一九一四年ですから、最終版までをとって見ても、『人生地理学』を、創価教育体系における宗教観にもとづいた価値論と、直接結びつけて考察するのには無理があると思いますので、私は致しません。牧口常三郎全集の『人生地理学』の、詳細な校訂、脚注、補注、解題をした斎藤正二も、巻末の「人生地理学研究のための序論（プロレゴメノン）」のなかで、「本書執筆時代の牧口は、未だ真宗越後門徒衆の一員であったかも知れないし、文章から推すと或いは一定の宗派（セクト）に所属することをせず、もっぱら抒情詩的共感（リリカル・シンパシー）から蓮如上人の『御文章』に関心を寄せたとどまるかも知れない。どちらにしても、『人生

地理学』時代の牧口の信仰心を、無理にも特定（アイデンティファイ）しようとする不必要な議論は慎んだほうがよいとおもう」と書いています。また私は、学術的な書き物あるいは話においては、日本人・外国人、生存者・物故者を問わず、著者や研究者名の敬称を略しておりますから、ここでも牧口常三郎と呼ばせて頂きます。

一 アカデミー地理学界およびジャーナルリズムにおける牧口常三郎の評価

『人生地理学』が日本地理学にとってもった大きな意味は、その初版発行当時から認められていました。農商務省地質研究所にいた小川琢治は、『人生地理学』発行直後、東京地学協会の機関誌であった『地学雑誌』百八十一号において、「人生地理学という呼称は既にある人類地理学、あるいは文化地理学、さらに人文地理学の内容に相当しているから、不適当」であるという批判を展開したものの、「余は此の一千頁の大冊を完成せる著者牧口常三郎君の真摯と勤勉とを驚嘆して措

く能はざるものにして、読み来るに及び其の涉獵の刻博、其の着想の斬新、其の論断の妥当……と書き、具体的に本の内容にはふれていませんが、一定の評価を与えています。ご承知かと思いますが、この小川琢治という地理学者は、帝国大学地質学科卒業ですが、和歌山の漢学者の家の出で、漢籍に詳しく、のちに京都大学地理学教授として、京都大学にある膨大な地図コレクションのもとを作った人で、湯川秀樹、貝塚茂樹、小川環樹など、いずれも東大または京大教授の、小川四兄弟の父親です。

また『人生地理学』は、定価二円と当時としてはかなり高価であったにもかかわらず、当時発行の書物としては実に早い速度で増刷・重版が行われ、一九一四年まで版を重ねました。すべての版にあたったわけではありませんが、この本の奥付には、何部発行したかが明記されていませんので、いったい『人生地理学』が全部で何部発行されたのか分かりませんが、かなりたくさん部の数が読まれたことはたしかです。また、創価大学創価教育研究センターの、近年の資料・情報

収集の結果、『人生地理学』に関しては一九〇三年から一九〇九年の間に、約四十の書評・紹介文がいろいろな新聞・雑誌に掲載され、その大部分がこの本の特徴を紹介した好意的なものでした。書評・紹介を行った新聞には、発行部数が当時上位七位に入っていた、『万朝報』、『時事新報』、『東京朝日新聞』、『都新聞』がふくまれます。

先ほど申しましたように、地理という言葉が日本語になったのは一七六〇年代のことですが、その後この言葉は日常語としても急速に普及しました。牧口も『人生地理学』のなかで二回にわたって引用しています。が、一八五〇年代の吉田松陰の『幽囚録』には、有名なマキシムである「地を離れて人無く人を離れて事無し、人事を論ぜんと欲せば、先づ地理を審にせざるべからず」があります。地理は、高等教育研究機関で制度的に確立される前に、政治・行政・軍事・教育などの、いわば応用・実践面で重視されるようになっていたわけです。現在日本の官僚組織のなかで、地理という名前を冠しているのは国土地理院だけですが、明治

初めの太政官政府の官僚組織のなかには、軍隊・大蔵省・民部省・文部省などに地理という名のついた部署が四つもありました。したがって、地理という名を書名にしたそれまでなかったような厚い概説書が、多くの新聞・雑誌によって注目されたのは当然のことでした。

一九〇三年という年は、日本においてアカデミー地理学が成立した、すなわち大学や高等師範学校で地理学が制度的に確立したばかりの頃です。小川琢治以外のアカデミー地理学者で『人生地理学』に注目した人がいなかったのは、彼らがみな日本や外国の大学卒業生で、師範学校しか出ていない著者の本などはとりあげないという、身分社会特有の偏見もあったでしょうが、彼らが古い地理学観にとらわれていて、牧口の先駆的な地理学についての考え方を理解できなかったのが、最大の理由であると私は考えます。この点で、小川琢治、それから後に郷土会の仲間として牧口を温かく迎え入れた新渡戸稲造、柳田国男などは、非常に立派であったと考えられます。あとは一九四三年に、大

な老少学校長の風貌であった」との印象を記しています。

一九一〇年にはじまる第一次郷土会と、一九二八年の新渡戸稲造帰国後しばらく続いた第二次郷土会とは性格がかなり違いますが、第一次、第二次を通じて常連であった地理学専門家は、牧口常三郎と（東京）高等師範学校卒業の小田内通敏だけでした。しかし小田内は、牧口にはまったく言及していません。第二次世界大戦終了まで、時局にかなり迎合的なことを書いていた国松久彌は、牧口常三郎と面識はなかったと考えられます。

このように、専門の地理学者が『人生地理学』を本格的に評価しはじめたのは一九七〇年代以降であり、創価学会関係者の読者が広く『人生地理学』を読むようになったのも、一九六〇年代以降のことです。ですから問題になるのは、二十世紀初頭においてかなり多数の『人生地理学』を購入した読者層が、具体的にどのような人たちであったのか、そして彼らが『人生地理学』をどのように読み、そこから何を学びとったの

阪第二師範の山口貞雄が、いささか見当違いの評価ですが、地人相関論に基づく最初の人文地理学書であるとの評価を与えたくらいです。

アカデミー地理学者が『人生地理学』に本格的に注目あるいは再評価した最初の例は、私の知る限り、一九七一年に日本地理学会が、小川琢治・山崎直方という、二人の京都・東京帝国大学の最初の地理学教授生誕百年行事をしたことと、一橋大学名誉教授で、元日本地理学会会長であった石田龍次郎が、「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」という講演を行い、そこで「明治期地理学の異色の二書」として、内村鑑三の『地人論』（一八九四年初版は『地理学考』）と牧口の『人生地理学』について論じました。その後一九七二年と七三年に、当時専修大学文学部にいた国松久彌が、『人生地理学』に関する長い論文を二つ大学の研究紀要に発表し、それをもとにして一九七八年に『人生地理学』概論が発行されたわけですから、なお、石田龍次郎は、一九三五年末頃新渡戸稲造宅での第二次郷土会の席上で牧口に紹介され、「いかにも実直朴訥

かということとです。この問題を考えるために、『人生地理学』の社会的背景としての、牧口が生きた明治・大正時代の日本における、広い意味での地理に関する知識と応用、そして地理の教育がどのような状態であったかを、次にみてみることにします。

二 『人生地理学』の背景

学校制度が発足したのは一八七二年で、当時義務教育の尋常小学校は四年制でしたが、上の二年で地理または地学という教科が必修でした。日本だけではありませんが、国民国家が創り出され、義務教育として国民教育がはじまった段階から、国語・歴史・地理は、いわば国民を創り出すための教科として重視されてきました。国語は、いうまでもなく、方言しか知らなかった国民に共通語、そして法律を制定し、徴税・徴兵という国家の意思を伝える言葉をたたき込む必要があったからであり、歴史は共通の過去をもつという一体感、そして地理は共通の国土に生きるという一体感を養う教科だったからです。ついでに申しあげると、日

本では、唱歌という伝統的感性ではない、いわば西洋の感性をメロディを通じて子どもにたたき込む教科も重視され、小学唱歌としてそれが見事に成功しました。

明治維新後わずか四年で学校制度を発足させたわけですから、教科書など準備が間に合わず、学校制度発足とともに東京の師範学校に文部省が教科書作成を命じた有様で、当初は、民間ですでに発行されていた本を適宜教科書として用いました。地理に関して非常に多く使われたのが、一八六九年発行の福沢諭吉の『世界図説』でした。これは当時大阪で海賊版まで印刷されたほどのベストセラーで、世界を大きく文明と未開にわけ、日本はまだ半開だから文明開化に努めなければいけないという欧化主義を謳ったものでした。

しかし、一八八〇年代からそのような欧化主義に対する反動が出てきて、一八八六年に、森有礼文部大臣のもとで「帝国大学令」、「師範学校令」、「小學校令」、「中學校令」が制定され、小学校教科書についても、「文部大臣ノ検定シタルモノニ就キ：審査シ府縣知事ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ルヘシ」という検定制度にな

の校閲および補記を行い、『日本風景論』（一八九四年）の著者として著名であった志賀重昂が、一八八〇年に入学しています。初期札幌農学校の教師はすべて米英人で、地理学の授業はありませんでしたが、農学を通じて自然と人間との関係に大きな関心をはぐくみ、牧口が地理学の師と仰ぐに至ったような、国際感覚の豊かな人材が育ちました。

中等学校（現在の高等学校に相当）進学者が増えるとともに、大学卒業生だけでは中等学校の教師が不足し、一八八六年からは、文部省が実施する検定試験（文検）に合格した小学校の教師に、その資格が与えられるようになりました。この制度は、第二次世界大戦直後の学校制度改正のときまで続きますが、文検は非常に難しい試験で、地理という教科についてみても、毎年何百人という受験者のなかから合格するのは十人または二十人台にすぎず、合格まで何回も受験し、場合によっては十年以上かかることもありました。

牧口常三郎が、警察署の給仕をしながら苦学して北海道尋常師範学校に入学したのが一八八九年、日本が

りました。教科書の採用部数は教科書会社の死活に関わりますから、一九〇二年には教科書採用をめぐる教科書疑獄が起り、これを機会に文部省は、「文部省が著作権を有するものに限る」という国定教科書制度にして、これが第二次世界大戦後の教育制度改革時まで続きました。

小学校の教師は師範学校卒業者がなったわけですが、この師範学校というのは、各道府県に設けられ、全寮制でお小遣までくれるのですが、卒業後一定年限教職に就く義務がありました。師範学校をふくむ中等学校の教員免許は、大学または後に設けられる高等師範学校卒業者に与えられましたが、帝国大学は一八九八年までは東京にしかなく、他に大学卒業生すなわち学士の称号が与えられたのは、一八七六年開校の札幌農学校出身者だけでした。なお、この札幌農学校第一期生には、『農業本論』の著者で、柳田国男を幹事にして自宅で開催した郷土会を通じて、牧口に大きな影響を及ぼした新渡戸稲造、第二期生には、『人生地理学』で多く参照されている内村鑑三がいましたし、『人生地理学』

徐々に国家主義的傾向を強めていった時期でした。北海道師範学校は札幌にありましたが、エリート校であった札幌農学校あるいはその卒業生とは関係がなく、むしろ注目すべき点は、当時地理教育界において新しい革新的な流れをつくっていた、ベスタロッチの教育理念をくむ開発主義教育運動や、子どもの成長過程にしたがって、身近なものの学習から順次視野を広げていく、あるいは経験的事実から原理を帰納するという、オスウィーゴ師範学校に学んだ高嶺秀夫を通じて伝えられたジョホノット教育学が、東京師範では根を絶たれた後も、一八九〇年代初頭まで、福島、長野、北海道師範などでは、まだ生命を保っていたことでしょう。よく知られているように、牧口のその後の郷土教育論、創価教育学体系に於いて、『如氏教育学』は大きな影響力をもったのでした。

牧口は、一八九三年に北海道師範を卒業した後、付属小学校の教師になり、わずか三年後の一八九六年に、文部省地理科中等教員検定試験に合格。翌年には、出身校の北海道師範学校、現在の北海道大学教育学部の

助教諭になりました。『人生地理学』の執筆をいつごろからはじめたのかは分かりませんが、師範学校卒業後、文検合格のための猛勉強をしているなかで、地理学の学問的な概説書がない、さらに地理という教科が地名や場所についての知識の寄せ集め、いわば暗記科目になっていて、そこに学問としての体系がないことに気がつき、そのような地理学および地理教育に体系を与える書物の必要を痛感し、執筆をはじめたものと考えられます。一九〇一年に北海道師範を辞職して上京し、この著作に専念することになりました。辞職の直接原因であるかどうかは分かりませんが、日清戦争後、日本の教育は国粹主義的傾向を強め、これに対して、『人生地理学』を貫いているヒューマニズムと、極端な国家主義的あるいは帝国主義的膨張政策に対する牧口の反発が、牧口に師範学校の教師を続ける意欲を失わせたことは十分に考えられます。東京で『人生地理学』を刊行した後の牧口は、一時期文部省図書局で地理教科書編纂にたずさわった以外は、一九三二年までの大部分を、尋常小学校の教員あるいは校長として過ごした。

だからこそ版を重ねたのだと思います。

校閲者として志賀の名前を出さないと、一介の教師にすぎなかった牧口の本が出版されることはなかったでしょうし、衆議院選挙を控えて多忙であったのにもかかわらず、志賀は丁寧に原稿を読み、多くのコメント（注記）を加えました。ただ、環境論的地理学の考え方にどっぷりつかってしまっていた志賀は、しばしば牧口の極めて柔軟な考え方に對して、環境決定論的な見解を押しつけています。また『人生地理学』第三編は、牧口が、経済学、社会学、政治学などの文献を読んで、当時の地理学の概説書では扱われていなかった内容を先駆的にとりあげたものですが、志賀は、第三編の地理学的意義を、当時としては致し方なかったわけですがまったく理解しておらず、コメントの数も第一編、第二編に比してずっと少なくなり、また時には見当違いのことを書いています。もちろん世界各地の事情、科学技術の新しい状況などに関しては、丸善から新しい英語の文献を取り寄せてよく目を通していた志賀の文章によって、牧口の記述が補われている場合

ました。

一九〇一年に上京した後の東京での生活は、経済的に苦しかったようですが、牧口は『人生地理学』の執筆に専念します。一九〇二年春、『日本風景論』の著者として著名で、早稲田大学の前身である東京専門学校で地理学を教え、政界・言論界でも活躍していた志賀重昂を訪れて、当初二千ページ分もあった原稿を示し、志賀の校閲を得て、だいぶ短縮されて『人生地理学』が出版されました。当時あった日本語での地理学の概説書としては、外国の概説書の焼き直しばかりですが、内村鑑三の『地人論』、志賀重昂の『地理学講義録』などわずかしがなく、いずれも牧口の本ほど詳しいものではありませんでした。この点で、地理という名前はかなり人びとによって知られていながら、それがどういうものかを一般読者に示したものとして、この本は画期的なものであったし、同時に、中等学校の教員資格検定試験のための受験勉強をしていた、全国何百人の小学校教員にとって、人文地理学を体系的に概説したもののとして、格好の受験参考書であったでしょう。

も多くあります。

志賀はしばしば国粹主義者と考えられていますが、日露戦争後台頭してきた帝国主義的膨張政策を支持するような国粹主義者ではなく、国際社会における日本がおかれている困難な立場を良く理解した、国際感覚の豊かな言論人でした。『日本風景論』で志賀が主張したのは、決して超国家主義ではなく、日本固有の風景美を認識することによって、日本という国土への愛着を育もうとするものだったのです。

三 『人生地理学』の特色または

現代地理学に通じる先駆的な点

(一) 参考文献

牧口は、彼の学歴からして当然のことですが、おそらく外国語の専門的文献を読むことはできなかったと思います。しかし、当時日本語で読むことのできた外国の著者の文献は、よくぞこれだけ調べて目を通したと感嘆するほど徹底的に読み、それを自分の頭で練り直してこの本の文章を書いています。各章に参考文献

はあげられています、よく調べてみると、参考文献としてあげられていないものまでも、日本語で読むことができる限り徹底的に勉強していることが分かります。一九三六年に「我国地理学会の回顧」という文章で、当時京都帝国大学教授であった石橋五郎は、牧口が翻訳のあるものしか参考にしておらず、したがってこの本は、人文地理学の概説書とは認められないと書きましたが、これこそ、外国の学者の研究を輸入することが学問だと思っていた、アカデミーの学者の無能さを露呈した文書だといえましょう。

(二)「人生地理学」という書名

このような書名の本はその後出版されておらず、前に指摘したように、小川琢治はなぜ人文地理学あるいは人類地理学など、すでに用いられている用語を用いなかったのかと批判していますが、私は現代地理学の観点からして、牧口が第二編を「地人相関の媒介としての自然」と題したことに、この『人生地理学』という書名は密接に関連していると考えます。牧口が強

調したかったのは、地理学の対象は、自然条件が人間生活をどのように制約するか、あるいはそれにどのような影響を与えるかということよりも、場所によって、そしてまた時代によって常に異なる人間生活にとつての、自然の意味であつたわけです。人間社会が、場所あるいは環境に対して意味を与えるという側面を、環境が人間に影響を与えるという側面よりも重視したという点で、現代地理学の新しい方向を、牧口は数十年前に先取りしていたわけです。人生という言葉、人生論などの人生ではなく、人間生活のことであると理解すれば、この書名は少しもおかしくありません。

中国出身で、アメリカの大学でずっと地理学を教えていたイー・フー・トゥアンは、一九七四年に『トポフィリア』(この題名で訳本もあります)という本を出しましたが、トポとはトポスすなわち場所のことです、フィリアは愛情、愛着、好みなどを意味します。すなわち人間は、身のまわりの町や村から郡や県や国に至るまでの、さまざまな範囲の場所に対して意味を与えらるとともに、愛着あるいは愛情、すなわちアイデンテ

ィティ、難しくいえば帰属意識をもつということを指摘したわけです。場所に対するアイデンティティは、同時に他の場所に対する他者意識と表裏一体をなしています。パレスチナ出身で、アメリカのコロンビア大学で英文学、比較文学を教えていたサイドは、一九七八年の『オリエンタリズム』と題された本のなかで、西洋またはヨーロッパ社会は、歴史的に、オリエンタルという概念に後進性、怠惰、専制、非合理性など、あらゆるマイナスイメージを結びつけて、自らの優越、政治的・軍事的支配を正当化するようなアイデンティティを育んできたことを指摘して、地理学をふくめたさまざまな学問に大きな影響を与えました。

牧口の『人生地理学』を貫く大きなテーマとして、郷土から出発して都市や国、さらには地球に至るさまざまなスケールでの、場所に対する人間の側からの意味づけが論じられています。他者意識という言葉は用いられていませんが、初版での最後の方の第三十章「生存競争地論」で、生存競争の空間的単位と生存競争の仕方の変遷をみているのは、現代地理学の観点から

みても極めて重要なことです。この百年間、いろいろななかたちで他者すなわち敵という意識が創り出され、たくさん戦争・殺し合いが世界中でなされてきましたが、九・一一以降、「文明の衝突」の名のもとに新しい他者意識が創り出され、数年前には予想もしなかったようななかたちでの殺し合いが、世界で行われています。場所や環境がもつ意味は、それが人間社会に与える物理的・物質的作用のみでなく、場所や環境に対する社会が与える意味あるいはイメージによるのだという、オリエンタリズムにも通じる考え方、すなわち地理的想像力、場所に対するアイデンティティと、それと表裏関係にある他者意識を問題にしたという点で、「人生地理学」という用語は極めて現代的なのです。

(三) 立地論を地理学の体系にとりこんだ先駆性
第三編の「地球を舞台としての人類生活現象」は、現在の地理学の分類からいえば、社会地理学、文化地理学、経済地理学、政治地理学に該当する内容で、こ

れはもはや環境論にもとづく地理学ではありません。すでに何人かの論者によって指摘されているように、この編では、狭い意味での地理学に関する文献はまったく参考にされておらず、社会学、経済学、政治学などの文献の勉強の上に、牧口独自の地理学が展開されています。この編で牧口が取り扱ったような内容は、十九世紀後半の欧米、そして日本の地理学ではまったく取り扱われなかったことであり、極めて少数の地理学者が一九三〇年代から、そして多くの地理学者が一九六〇年以降になって、経済学、社会学、政治学、社会理論やカルチュラルスタディーズなどの文献を勉強しながら、環境論的地理学とは立脚点をまったく異にした新しい地理学として、打ち立てるようになった分野なのです。この点で第三編は、当時の地理学の常識をまったく逸脱していますが、幸いにして一九七〇年代になって『人生地理学』の価値を認めるようになった日本のアカデミー地理学者、石田龍次郎と国松久彌は、いずれも『人生地理学』の本領はこの第三編にあることを指摘しています。

先ほど申しましたように、牧口が外国語の文献を読まず、当時日本語訳があっただけの文献からこれだけの経済地理学を展開したのは、驚くべきことだといわなければなりません。牧口にとって重要だったのは、説明原理、つまり彼の好む用語でいえば「理法」、「原則」、「原理」の追求でした。この追求において牧口をとらえた重要な説明原理のひとつが、一八二〇年代に東ドイツで農場経営にあたりながら農業立地論を展開した、フォン・チューネンの理論です。牧口の言及は、チューネンの『孤立国』の紹介にとどまらず、その「理法」を応用しての諸現象の配列の説明を目指しており、農業だけではなく、水産業、交通業、さらには政治地理学にまでおよんで、原始的産業国と商工業国との相違を、この「理法」で説明しています。ただ国松久彌は、牧口による「チューネン氏の理法」の紹介が、チューネン本来のものは「似て異なるもの」であることを、戸惑いながら指摘しています。

牧口が『人生地理学』においてあげている参考文献のなかで、チューネンに言及しているのは、新渡戸稲

造の『農業本論』など三冊だけですが、よく調べてみると、一八八一年に駒場にあった農科大学（東大農学部の前身）の関係者によってチューネンの『孤立国』の紹介がすでになされておき、牧口は参考文献としてはあげていませんが、実際に参考にしたのは、新渡戸など札幌農学校系統によるチューネン紹介ではなく、帝国大学農科大学系統の文献だったことがわかります。

新渡戸などがチューネンを正確かつ忠実に紹介していたのに対し、牧口は、林業（森林）をチューネンが考えたような都市近郊農業のすぐ外側ではなく、一番外側に立地すると考えました。これは、林業は最も粗放な土地利用であると考えたことによるのでしょうか、同時にこれも、帝国大学系統のチューネン紹介から学んだものであることが分かります。ついでに申せば、近郊農業のすぐ外側に林業が位置するというのは、日本では非現実的であるように考えられがちですが、実際には、現在多摩ニュータウンが位置しているあたりから青梅にかけては、江戸・東京への薪炭供給地として林業がさかんでした。

なぜ牧口が、チューネン理論を学んだ文献をあげなかったのかは分かりませんが、このことから、牧口が、参考文献としてあげているもの以外にも非常に広範に、日本語で読める限りの外国人著者の文献を勉強していたことが分かります。また牧口は、初版第二十八章の「国家地論」において、交通機関の進歩の結果、チューネン圏の考え方が、国際間分業にも適用できることを指摘していますが、地理学の分野で似たような考察がなされるようになったのは一九五〇年代のことであり、その当否はともかく、これも極めて先駆的な試みであったことになりました。

もうひとつ、経済地理学の分野における牧口の先駆的な考え方に注目してみましょう。アルフレッド・ウェーバーによる工業立地論の体系的提示は、一九〇九年にはじまるわけですが、牧口は、原料地、製造地、および消費地の位置関係を輸送費との関係で見事に把握し、ウェーバーによって概念化された減量原料、すなわち製造過程において重量が減る原料の概念に実質的に到達し、それが特定の場所にしか産しない、すな

わち局地原料である場合には、原料産地に製造業が立地することを指摘しています。これらは、牧口がすべてをまったく独自に考え出したわけではなく、経済学の文献では、空間関係は断片的にしか取り扱われていませんでしたが、アルフレッド・ウェーバーによって体系化される以前の、関連する経済学の文献を日本語で読める限り読んで勉強して、ウェーバーと同様の理論的結論を導き出していたわけです。牧口は体系的に経済学の勉強をしたわけではありませんが、限界効用の概念をかなりよく理解していたと私は考えています。

(四) 政治地理学的あるいは地政学的考察の斬新性

『人生地理学』では、現代地理学の分類からいえば政治地理学あるいは地政学に属するものに、かなりのページがさかれています。政治地理学は、地理学の中でも古くから議論されていた分野ですが、十九世紀の政治地理学は、国境が山の分水界や川など自然的境界なのか、それとも地図の上に定規でひいた直線のような人為的境界なのかという議論が主であって、牧口

もこのような議論にかなりのページをさいています。しかし十九世紀末になって、西洋列強の間で領土・植民地をめぐる争いが激しくなってくると、そのような帝国主義列強の対立関係を説明する原理が、政治地理学に求められるようになってきました。

ひとつは、一八九七年にフリードリッヒ・ラッツェルによって書かれた『政治地理学』で示された考え方で、国家はひとつの生物体のようなものであるから、国家間の生存競争があるのは当然であり、生物体が生きていくためには生活空間を必要とするから、国家が生活空間を求めて領土拡大をするのは当然であるという理論です。このような国家有機体説にもとづく政治地理学は、のちに地政学、ゲオポリティークとして、ナチスドイツの膨張政策を正当化する理論にも利用されました。

もうひとつは、二十世紀初頭のイギリスの地理学者、ハーフオード・マッキンダーの議論で、彼は、イギリスの対外政策が地理的条件を考慮に入れなければいけないという立場からいろいろな政策提言を行い、第一

次世界大戦後のバルカン半島や、中近東における国境や領土の分割線を定めるのにも、重要な役割を果たしました。牧口は『人生地理学』において、国家間の生存競争、いわば帝国主義権力の現実政治（リアル・ポリティクス）を透徹した目でみつめ、分析することによって、当時としてはまだ日本に紹介されていなかった、政治地理学の新しい動向と同じ結論に到達していたわけです。

社会がこのような競争原理によっていることを、牧口は事実として認めはしましたが、第三十章の「生存競争地論」をよく読めば分かるように、彼は、競争だけを社会の唯一の支配原理と考えることには批判的で、競争原理から共同原理への移行を、進歩の最終段階と考えていました。「人道的競争形式は之を今日の国際間に於て見るあたはざれど、生存競争場裏の最終の勝利者が必ずしも経済的優勝者にあらずとは、現在に於ても既に思想発達の或る程度以上の者には認識せらるる所なれば、経済的争闘時代に代はつて次に来るべきものは、人道的競争形式ならんとは吾人の想像に難から

ざる所なり」と述べているわけです。ここに牧口の理想主義、あるいはヒューマニズムを読み取ることができますが、二十世紀の現実には、ふたつの世界大戦のみならずたくさんの局地戦争を経験し、ふたつの超大国の対立が解消した後でも、人道の名、民主主義の名のもとに、ますます激しい競争、あるいは殺し合いが続いており、牧口の理念どおり世界が歩んだわけではありませんでした。

(五) 「郷土」概念の豊かさ

すでに、「人生地理学」という題名との関連で、現代地理学の観点からみた『人生地理学』の最も注目される点は、場所の意味を与えるのは人間の側だという立場を、牧口が先取りしていた点にあることを指摘致しました。それとの関連で、第二章の「観察の基点としての郷土」にはじまり、郷土という言葉が牧口は何回も用いられますが、第二章ですでに「郷土とは何ぞや。其範囲は観る人の立脚地によりて異なる」と述べているように、郷土そして場所に対する人間のアイデンティ

ティは、人間の成長過程とともに拡大するのみでなく、現代社会にあつては、それが多様で重層的であることをはつきりと認識しています。

「あなたはどこからきたか」という質問に対して、人間は状況次第で、何とか町という住所を答えるかもしれないし、荻窪や金町という近くの鉄道駅を答えるかもしれないし、鹿児島や薩摩あるいは高知や土佐といった出身地で答えるかもしれないし、国際的な場での会話だったら、日本と答えるかも知れないわけです。だからこそ牧口の郷土教育論は、後に一九二〇年代後半から文部省がすすめた郷土教育運動、すなわち国家神道と関連して、郷土の氏神信仰を通じて天皇制と結びついた、超国家主義を鼓舞する運動とは、はつきりと一線を画するものであったわけです。第一次郷土会の幹事役であつた柳田国男は、後に文部省筋からの郷土研究が強調されるようになったとき、はつきりとそれに反対して、一九三二年の山形における講演でも、「割拠孤立した郷土知識が何らかの価値あるやうに思ふ」のは、郷土研究の語のはき違えであると述べ、狭

四 『人生地理学』の限界

以上、百年前に出版された『人生地理学』が、現代地理学の観点からみて極めて先駆的なものであつたことを、いくつかの点について指摘致しました。同時に、それが時代の制約を大きく受けていたことは当然のことです。二十世紀は、おそらく後世の歴史家によって戦争と革命の世紀であつたと特色づけられるでしょうが、過去百年間の人類の歴史は、日本においても世界においても、ある意味では想像もしなかつたようなことが、現実には生じることの連続でした。そしていかにすぐれた頭脳であれ、人間は、現実には生じていることしか問題にし、考察することができないわけです。

現代の交通通信技術によって、十九世紀地理学においてあれほど大きな意味をもっていた「距離」というものが、その意味をまったく変えた、あるいはいくつかの局面においては失ってしまったことは、当然牧口の想像しなかつたことでした。当時は、エネルギーといえば、重い薪や石炭を運んでこななければなりません

い郷土を研究するのでなく、郷土で日本を研究するのが郷土研究であることをはつきりと述べています。それだからこそ、柳田の郷土研究は、日本民俗学という体系を志向することになったわけでした。

ここで注目しておかなければならないのは、郷土会の一員として毎月新渡戸宅での研究会に出席し、柳田などと共に村落調査などに従事する以前、すでに『人生地理学』において、柳田の郷土観に通じる郷土概念を牧口がもっていたことです。日本民俗学に大きな関心をもち続けた地理学者は何人かいましたが、そのような地理学者は、結局民俗学と地理学という二足のわらじを履くことになりました。しかし牧口は、郷土という概念を通じて、ふたつの学問を自分のなかで統合する契機を宿していたのだと思います。ただ牧口は、地理教師という自らの職業から地理教育論を展開して、地理学の具体的研究に従事しなかつたため、日本民俗学と現代地理学とを統合するという課題に、具体的にこたえることはありませんでした。

でしたが、牧口は慧眼にも、登場したばかりの電力が、工業化に大きな役割をはたすだろうことには注目していました。しかしそれが、二十世紀後半に、いわゆる情報革命をもたらすだろうことは、当然のことながら彼の視野にはありませんでした。牧口が『人生地理学』を執筆していた頃、夏目漱石、というより夏目金之助は、ロンドンにあつて痰が真っ黒になるスモッグに悩み、耳をつんざくばかりの騒音の地下鉄に対する憎しみをつのらせていました。日英同盟で文明国の仲間入りをしたと浮かれ、イギリスの代理としてロシアの南下をくい止める戦争にばく進する祖国を、苦々しい思いでみつめていました。

エリートであつた漱石はこのようにして、バラ色にみえた工業文明・産業文明のマイナス面に目をやり、国際関係の本質を見抜くことが出来たわけですが、牧口は、後進工業国日本の現実につかり、そこから逃げ出すことなど出来なかつたわけです。たしかに、現実に存在しているものしか問題として考察することができないのは人間の宿命ですが、すぐれた知性は、事柄

の本質、構造を洞察し把握し、将来生じる問題を考察する枠組みを与えることができます。牧口の『人生地理学』は、そのようなすぐれた、そして強靱な知性の産物として、今なお私たちに訴えるものをもち続けているのです。

しかし『人生地理学』は、もうひとつ大きな限界をもっていたことを考える必要があります。牧口と同時代の読者の大部分が、『人生地理学』が提供する地理的知識を学び取っても、そこにある、多くの点で現代地理学の観点を先取りしたような先駆的な視点、新しい分析の枠組み、構造の本質の把握を読み取ったとは、私は残念ながら考えません。牧口にとって不幸なことであつたこのような事態の最大の原因は、ちょうど『人生地理学』の刊行と同じ年に、最初の小学校国定教科書が発行されたことに象徴的に示されているように、教育・研究に対する国家統制が強化されたことにあると考えられます。

明治の初めには、地理学は行政、すなわち土地台帳や地籍図の作成、道路・港湾などのインフラストラク

ルに、すなわち根源にまでさかのぼって再点検することではないでしょうか。これが、『人生地理学』刊行百周年にあつて、私たちが学ばなければならない、もうひとつの重要なことなだと私は考えます。

文献（初出のみを記す）

『人生地理学』のテキストは、初版本によつていても信頼を置くことができ、また斎藤正二による丁寧な校訂・脚注・補注・改題がなされている、第三文明社版全集第一巻、第二巻によつた。補注が第十九章途中までしかないのが残念である。あとは、図書館であられる限りのいくつかの版にあたつたほか、一九〇五年発行の第五版によつて、聖教文庫版も参考にした。初版本と第五版との間には、とくに第三編に関してかなりの異同がある。『人生地理学』の同時代評に関しては以下の文献がある。塩原将行（二〇〇三）「牧口常三郎著『人生地理学』四十一の書評」（『創価教育研究』二二）、沖慶子（二〇〇三）「牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評」（『地理科学』五十八）。引用または言及した、『人生地理学』についてのアカデミー地理学者の評価を次にあげる。小川琢治（一九〇四）「人生に及ぼす地理学の影響」（牧口常三郎著『人生地理学の批評』）（『地学雑誌』百八十一）、石橋五郎

チャーの配置など、実用的な面で大きな意味をもちましたが、二十世紀初頭においては、もっぱら参謀本部に奉仕するための地理学、忠良な国民というよりも臣民を養成する地理学になっていました。当時の地理学の状態を知ろうとする読者、そして小学校教師から中等学校教師に自らをグレードアップさせるため、文検の受験勉強のために読む読者も、今日私が指摘したような、『人生地理学』の革新的、革命的な内容が現実とあまりに乖離しているために、牧口がいたかったことを読み取り、理解することが出来なかったのだと思います。

こわいののは、ある社会全体がこのようにひとつの方向に向かつて突つ走つていくときには、それに対する警句にみちた発言も無視される、理解されないということです。現代の私たちにとつて重要なのは、牧口の叡智、先駆的な指摘に学ぶだけでなく、『人生地理学』の、そしてその著者の運命に思いをいたし、現在の自分自身、そしてこの社会に対して、そのような盲目的な暴走をしていないか、言葉の本来の意味でラディカ

（一九三六）「我国地理学の回顧」（『地理論叢』八）、山口貞雄（一九四三）「日本を中心とする軌近地理学発達史」（『済美堂』、石田龍次郎（一九七二）「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」（『地理学評論』四十四）、国松久彌（一九七二）「牧口地理学と近代地理学」（『専修人文論集』十）、同（一九七三）「牧口地理学と近代地理学 二」（『専修人文論集』十一）。地理学者による『人生地理学』に対する言及としては、Takeuchi Keichi (1974), "The Origin of Human Geography in Japan," *Hirotsubashi Journal of Social Studies*, 15が、私の書いたもののなかでは最も古い。牧口地理学の獨創性、とくに第三編のそれに対する十全な理解には、まだ達していない。粟生一郎（編）（一九七六）『復刻 人生地理学 解題』（第三文明社）には何人かの地理学者が執筆しているほか、国松久彌など四人の地理学者による座談会記録も収録されていて参考になる。牧口の年譜として最も信頼できるのも、ここに掲載されているものである。牧口によるチューネン受容につづいての本格的な研究としては、Ohji Toshio (1980), "The Adoption of H. von Thünen's Location Theory in Japanese Geography," *Geographical Institute, Kyoto University* (ed.), *Geographical Languages in Different Times and Spaces*, 応地利明（一九八二）「わが国地理学界へのチューネン」『孤立国』の紹介——牧口常三郎著『人生地理学』における紹介を

めぐって「京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』、地人書房」、同（一九八三）「わが国地理学へのチューネン『孤立国』の受容過程——その学説的研究」（京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』、地人書房）がある。その他以下のものがある。Takeuchi Keiichi (1984/85), "Strategies of Heterodox Researchers in the National School of Geography and Their Roles in Shifting Paradigms in Geography," *Organon*, 20/21, 岡田俊裕（一九九四）「牧口常三郎『人生地理学』の地理学史上の再評価」（『地理科学』四十九）Takeuchi Keiichi (1998), "Geography and Buddhism in Tsunaburo Makiguchi," Ute Wardenga and Witold J. Wilczynski (eds), *Religion, Ideology and Geographical Thought* (WPS Kielce Studies in Geography 3), (2000), "Tsunaburo Makiguchi 1871-1944," *Geographers: Biobibliographical Studies*, 20.

地理学者によるものではないが、近年『人生地理学』から、現代的な意味をもつ環境問題・世界ヴィジョンを考える、著書・論文がいくつ公表されている。注目したいいくつかだけをおく。村尾行一（一九九七）『人道的競争』のすずめ——牧口常三郎と『人生地理学』の平和思想（『潮』四百五十六）、宮田幸一（一九九五）『牧口常三郎の世界ヴィジョン——『人生地理学』のメッセージ』（第三文明社）、山本修一（一

九九四）『人生地理学』と環境問題——『人間生態学』の視点から（『東洋学術研究』三十三）、村尾行一（一九九三）『共生』に対する人生地理学の視座（『東洋学術研究』三十二）。

講演のなかでふれたイーフォー・トゥアンには、多くの日本語訳があるが、さしあたり、関連する以下の文献をあげておく。イーフォー・トゥアン（小野有五・安部一訳）（一九九二）『トポフィリア：人間と環境』（せりか書房）、山本浩訳（一九八八）『空間の経験——身体から都市へ』（筑摩書房）。地理学にとつての場所の問題は、ロン・ジョンストン（竹内啓一監訳）（二〇〇二）『場所をめぐる問題——人文地理学の再構築のために』（古今書院）に詳しい。オリエンタリズムについては、勿論エドワード・サイード（今沢他訳）（一九八六）『オリエンタリズム』（平凡社）をはじめとする彼の著書が最良の参考書であるが、カルチュラルスタディーズに関する解説書も、参考になるであろう。立地論に関しては、ピーター・ディッケン、ピーター・ロイド（伊藤喜栄監訳）（改訂版二〇〇二）『立地と空間——経済地理学の基礎理論』（古今書院）が良い参考書である。現代地理学について、用語・概念等を知るためには、以下の二冊の辞典が参考になろう。山本・奥野・石井・手塚（編）（一九九七）『人文地理学辞典』（朝倉書店）、浮田典良（編）（改訂版二〇〇三）『最新地理学用語辞典』（大明堂）。

小学校教科書国定までの地理教育については、中川浩一（一九七八）『近代地理教育の源流』（古今書院）、郷土教育については、伊藤純郎（一九八八）『郷土教育運動の研究』（思文閣出版）というすぐれた研究書がある。文部省中等学校教員資格検定試験に関する研究書としては、佐藤由子（一九八八）『戦前の地理教師——文検地理を探る』（古今書院）がある。

（たけうち けいいち／一橋大学名誉教授）

（本稿は、二〇〇三年九月二十四日に行われた講演内容を掲載したものです。）